

境界 9

義務の代価。

若いころ、義務は厳めしい言葉に見える。

規則の響きがある。

断念の響きが。

責務の響きが。

冒険の魅力はない。

成功の色はない。

幸福の言葉すらない。

だから、義務を夢見る者はほとんどいない。

夢見られるのは結果だ。

到達点だ。

獲得だ。

評価だ。

義務は後からやって来る。

静かに。

そして、他の何よりも長く留まる。

長年、私もまた、人生で最も重要な部分は目に見える部分だと信じていた。

昇進。

変化。

重要な決断。

勝利。

やがて時間が、どんな教科書にも説明できないことを教えてくれた。

人の一生は、特別な日々で測られるのではない。

普通の日々で測られるのだ。

誰も見ていない日々で。

ただ、なされるべきことをなすしかない日々で。

気が進まないときでも。

疲れているときでも。

世界が気づいていないように見えるときでも。

義務はそこに生きている。

継続の中に住んでいる。

熱意の中ではなく。

欲望と義務が逆の方向へ歩いていた瞬間を、いくつも覚えている。

誰もが知っている状況だ。

立ち止まりたい。

だが続けなければならない。

離れたい。

だが誰かがあなたを頼りにしている。

自分のことを考えたい。

だが責任が別の場所から呼んでいる。

そうした瞬間に、人生は単純で容赦のない問いを突きつける。

誰にも正しいことを強いられないとき、おまえは何者なのか。

答えは言葉からは来ない。

行動から来る。

義務には代価があると、早くから学んだ。

大半の人が想像するよりも、はるかに高い代価が。

時間を代償にする。

気力を代償にする。

機会を代償にする。

ときには、夢の一部さえ代償にする。

何かを選ぶことは、必然的に、別の何かを諦めることを伴うからだ。

代価のない人生は存在しない。

存在するのは、どの代価を払うかを選ぶ人間だけだ。

経歴のために家族を犠牲にする男たちを見てきた。

家族のために経歴を犠牲にする者たちも。

自由の名のもとに安定を手放す人々を見てきた。

安定の名のもとに自由を手放す人々も。

人生は無料の賞品を配らない。

いつも何かを別の何かと交換する。

この自覚は、世界の見方を変える。

とりわけ、裁くことをやめたときに。

どの選択の背後にも、他人の目には映らない見えない戦いが存在するからだ。

どの責任の背後にも、私的な代価がある。

一見成功に見えるものの背後には、しばしば知られざる断念がある。

年月が経つにつれ、自分の犠牲を語る者への敬意は薄れ、それを黙って生きる者への敬意がずっと深くなった。

本当に責任ある人々は、自分を語りたがらない。

自分にかかっているものを支え続けることで、手一杯なのだ。

家族。

組織。

共同体。

計画。

約束。

望んだわけでもなく柱になる人々がいる。

ある日振り返ると、他の者たちが自分に寄りかかっているのに気づく。

子どもたち。

親たち。

仕事の仲間たち。

友人たち。

脆い人々。

迷った人々。

安定を求める人々。

そのとき、義務は理論であることをやめる。

日々の存在になる。

いつも心地よいとは限らない存在に。

だが、物事に意味を与える存在に。

理解するのに何年もかかった教訓を覚えている。

義務は服従から生まれるのではない。

愛から生まれるのだ。

この違いがすべてを変える。

何かを愛するとき、人はそれを大切に世話する。

世話をするとき、人は責任を負うようになる。

責任を負うとき、人は重みを受け入れる。

そしてその重みは、ゆっくりと、自分の一部になる。

だから、人生で最も重要な義務は、押しつけることができない。

受け入れられることしかできない。

どんな法律も、愛することを強制できない。

どんな規則も、そこにいることを強制できない。

どんな権威も、去るほうが楽なときに残ることを強制できない。

これらは内なる決断だ。

そして、いかなる外からの強制よりも価値がある。

義務は人を幸福にするのかと、何度も自問した。

今では、その問い自体が間違っていると思う。

義務は、私たちを幸福にするために作られたのではない。

私たちを信頼に足る者にするために作られたのだ。

幸福は来ては去る。

信頼性は残る。

そしてそれこそが、人々が私たちを信じることを可能にする。

結局、人生で築くものは、大部分この信頼にかかっている。

信頼なしに持ちこたえる家族はない。

信頼なしに続く友情はない。

信頼なしに育つ組織はない。

信頼なしに生き残る関係はない。

そして信頼は、ほとんどいつも同じ問いから生まれる。

「この人は、必要なときにそこにいてくれるだろうか」

都合のよいときにではない。

楽なときにではない。

必要なときに。

時とともに、男であれ女であれ、人の真の価値はとりわけそこに現れるのだと分かった。

その問いへの答えに。

成功にではない。

言葉にではない。

意図にではない。

存在に。

信頼性に。

継続に。

そこに続ける者の静かな勇気に。

最悪の日々にも。

義務の代価はいくらか。

高くつく。

ときには、望む以上に。

だが、見捨てることに比べれば、限りなく安い。

引き受けた責任の代価は高いからだ。

だが、裏切った責任の代価はさらに高い。

そして時が過ぎるとき、遅かれ早かれ誰にでも訪れることだが、私たちは守り抜いた快適さを思い出しはしない。

思い出すのは、守った人々だ。

果たした約束だ。

背負うことを選んだ重みだ。

そして気づくのだ。犠牲しか存在しないように見え
たまさにその場所に、私たちの人生の最も深い意味
が隠されていたことに。